

家族の新しいかたち

「拡張家族」という社会実験に添う住まい

インタビュー

橋本浩和

株式会社フラットエージェンシー
プロパティマネジメント部長

山倉あゆみ

一般社団法人Cifft・京都下鴨修学館
コミュニティマネージャー

加藤しのぶ | 取材・執筆
宮村政徳 | 撮影



住まいを取り巻く環境が大きく変わろうとしている現代。ハード面としての「住まいのかたち」のみならず、血縁でつながった者が家族として共に生活するという従来当たり前とされてきた「暮らしのかたち」にも変化がおきつつある。

一般社団法人Cifftは、「拡張家族」というコンセプトのもと、多様な人々が共同で暮らしながらひとつの「社会実験」をしているという。Cifftにとって関西初の拠点となる「京都下鴨修学館」の事例を通して、その取り組みを紹介する。

京都市左京区下鴨の住宅街の一角、疎水ベリの角地にコンセプト型シェアハウス「京都下鴨修学館」はある。道路に沿ってV字型にのびた建物とその中央にあるエントランスの佇まいも含めて、どこか懐かしい雰囲気が漂う建物だ。

「1970年、親元を離れて学校に通う女子学生が安心して住めるようにという先代オーナーの思いから建てられた女子学生寮でした。2020年に全面改修しましたが、外観は当時の佇まいを残すようにしました」と話すのは、改修に携わった(株)フラットエージェンシー・プロパティマネジメント部部長の橋本浩和氏。同社は京都を拠点とした不動産仲介・管理業者としてさまざまな大学などと提携し、多くの学生に住まいを紹介してきた。この修学館のオーナーとも長年にわたるおつきあいだという。

中に入ると、屋内なのに風が心地よく通りすぎるのを感じた。目の前には広々とした廊下と光が射しこむ明るい空間が広がっている。50年の歴史を刻む建物の重厚感が漂いつつも開放感あふれる玄関では、Cifftのメンバーである山倉あゆみ氏が笑顔で待ってくれていた。山倉氏は食農プランナーとしてコンサルティング事業を本業としながら、Cifftのコミュニティマネージャーとして「京都下鴨修学館」の立ち上げの中心となった人物である。

建物を一見する限りは、家を共同で使用する一般的なシェアハウスの造りとなら変わりがない。しかし「京都下鴨修学館」はコンセプト

型とある通り、少し性格が異なっている。ここはCifftの掲げる「拡張家族」というコンセプトを共有したメンバーと、そのコンセプトに賛同する一般の居住者が、共に暮らしながら、新しい家族のあり方を模索する「社会実験の場」でもあるのだ。

「拡張家族」とは？「社会実験」とは？橋本氏、山倉氏のおふたりにCifftのこと、修学館を拠点とした経緯や建物の改修について、さらには実際に入居者を迎えてからのことなど、お話を伺った。

対話を重ねる暮らし——「拡張家族」

Cifftは価値観を共有するメンバーが共同生活を通して、家族とは何かを改めて問い直し、「共に暮らし、共に働く」ことを実践・発信する一般社団法人である。立ち上げは2017年、東京・渋谷の複合施設のワンフロアを拠点とし、価値観を共有する住民40人弱と「実験」と称する共同生活をスタート。

コンセプトの「拡張家族」を、山倉氏は「相手を家族だと思ってみる」ことを意識しながら共同生活をする実験」だと説明する。

「たとえば初めて会った人でも、自分の家族だと思ってみると、だんだん相手のことが『自分ごと』になっていく感覚が芽生えてくる。そういう意識の変化を重視しながら生活しています。つまり、拡張するのは家族というより自分

自身の意識、家族観なのだ」と最近気付きました」さまざまな「気付き」があることが面白いんです、と山倉氏。重要なのは「意識的に関わること」なのだろう。お話のなかで何度も「対話」という言葉が使われた。家族として意識しながら暮らすなかで必要になるのは、相手に自分の気持ちを伝えたり、相談ができる関係性の構築だが、「これが意外と難しい。だからこそさまざまな対話を重ねながら人間関係や固定観念を考え直す作業をしているのです」。

メンバーは共同生活にあたり通常の家賃に加え、組合費を払っている。幅広い年齢、多種多様な仕事をする人々が共に暮らしながら、さまざまな気付きを共有する。たとえば、自分に子どもがいなくても子どもを持つメンバーの子育てを共有することで、その苦労を知ることができるのも「家族だと思ってみる」ことから得られる体験だ。メンバーには多拠点居住者も多く、山倉氏も新潟や京都を含めた4拠点を行き来しているという。

スタートから5年。メンバー数も昨年100人を超えた。そして、公式拠点の4つ目が、関西初となる「京都下鴨修学館」である。

「京都下鴨修学館」が始動するまで

Cifft内で関西に拠点をという話があるなかで、物件探しのために相談したのがフラットエージェンシーだった。橋本氏はCifft側



閑静な住宅街の一角、疎水のせせらぎと共に鳥のさえずりや虫の鳴き声が絶えず聞こえてくる自然豊かなエリアに建つ「京都下鴨修学館」。春には見事な花を咲かせる桜並木を館内から見物し放題というのも大きな魅力だ。



共用スペースのリビングは、Ciftメンバーも一般居住者も自由に利用できる。食事や会議だけでなく映画鑑賞や健康体操教室などさまざまな交流の機会もある。



2階中央部に新たにつくられた共用のワークスペース。ちなみに壁やリビングのカーペットの色味などは山倉氏などCiftのメンバーの意見も反映されている。椅子や家具なども山倉氏をはじめメンバーが持ち寄ったものだ。



Ciftメンバーの多拠点居住者向けに用意されているシェアルーム。9畳の広さにベッドや寝具、ソファなどがコンパクトに配されている。一般居住者や定住者向けは4畳半タイプの部屋となるが、いずれも大きな窓があるため明るく、圧迫感はない。

から「拡張家族」の説明を聞いても、当初はその意味がよく分からなかったという。しかし、実際に渋谷のCiftを見学して衝撃を受けたそうだ。

「ひとつの部屋を複数の人が順番に使用したり、共用部分を全員が家族のように使用しているのが印象的でした。ちょうど従来のシェアハウスの運営では人との関わり方がスムーズにいかず、難しさを感じていたところでした。我々も新しいことにチャレンジし、自分たちの中に取り込んでみたいと思いました」

そのなかで候補となったのは、学生寮としての利用が難しくなり一時閉館したが、新たな活用方法を模索していた修学館である。

「オーナーの宮崎又行さんは、美術家であり、

住人のプロフィールは多様である方がいい。似たような経歴の人が重ならないようCiftメンバーからの希望者については、Ciftが担当し、2〜3時間をかけてオンライン面談を行った。一般居住者はフラットエージェンシーが担当、コンセプトを説明しそれを共有してくれる希望者をCiftに紹介、面談を経て居住者が決まった。

橋本氏は当初居室が埋まるのか不安だったというが、実際は早々に満室となった。現在も入居希望者は後を絶たず、ウェディングリストを作成している状況である。

相手のことが「自分ごと」になる

改修後の「京都下鴨修学館」のあらましを紹介



1階はこの廊下を挟み右側が談話室、左側が台所になっている。ほかに共用スペースはお風呂場とシャワールーム、洗濯室、洗面所などの設備が整っている。



柔軟な考え方をもちましたので、新しい取り組みもご理解いただけるのではという思いがありました。実際に渋谷のCiftを見学してもらおうと、『住人同士の関係性がうまく築かれていて、人が孤立しがちな現代に合っている』と賛同をいただきました」

2018年より修学館の改修計画が本格化。改修の設計を担当したのは建築家の土橋孝一氏。今のまま建物を生かし、四季の移ろいを肌で感じられる空間を大切にしたいというオーナーの希望や、Cift側の利用者としての意向も取り入れて設計が進められた。外観と居室の内部空間は昔ながらの風合いを生かしながらもとは34室あった部屋数を22室に縮小し、その分共用スペースを複数つくり、対話が生まれや

介しよう。まずは住人について。ひとりで暮らす定住者は10人、ほかの住人はひとつの部屋を複数名でシェアしているが、こちらはメンバーの子どもも含め3〜6歳の40人が登録している。Ciftメンバーと一般居住者の割合はいずれの入居形態も半々くらいとなっている。なお、シェアで使用する部屋の契約は、その部屋の代表者1名が借主となり契約書を交わし、シェアメンバーは同居人として名前を記す。賃料は一部屋2万5000円から4万円程度、シェアルームの場合の賃料の分担は部屋ごとの裁量、部屋の利用についても部屋別にあるカレンダーやメッセージ(SNS)を使ってメンバー同士で決める。もし自分が利用したい日にほかの人と希望が被る場合は、ほかのシェアルームの住人と交渉してもいい。そのために相談ができる関係性が築けていることが前提である。

居室の仕様は、4畳半一間と、二間を一続きとした9畳の2タイプ。どの部屋も窓が大きくとられ、光が射しこんでいる。風呂は一般家庭と同様のものがひとつ。シャワールームも別にあるとはいえず、定住者10人が使うのには足りないのではと問うと、「銭湯に行く人もいますし、お互いに相談しながらうまく回しているのでは」とつあれば十分。洗濯機も同じです。むしろ一部屋にひとつ置く必要が本当にあるのかということですよね」との山倉氏の答えが返ってきた。なるほど、そうかもしれない。己の無意識の思い込みに気付かされる。

すい場を設けることとした。ところが実際の改修作業が始まってすぐにコロナ禍に見舞われ、工事は遅れることに。一般入居の始まった2020年9月の段階では、屋根や壁などの外装や庭が工事中だったという。しかし「家が出来上がっていく様子を見たり、左官屋さん、庭師さんといった京の職人さんと知り合えたり、貴重な体験ができました」と山倉氏。「社会実験」として物事を捉えるからだろうか、その目線は柔軟である。

改修工事に並行して居住者の募集も進められた。先述の通り住人はCiftメンバーとそのコンセプトを共有する一般居住者だが、Ciftにとって一般居住者と共に住むのは初めての試みで、「新しい実験」でもあったという。

広々とした台所にはきれいに磨かれた調理器具が整然と並び、大きな冷蔵庫にはぎっしりと食材が入っていた。食材は住人の持ち寄りだが名前が書かれていなければ誰が使っても自由である。誰かがつくり残した料理をほかの人が食べるのも自由。もちろん、ひとり分だけつくってもいい。

共用スペースは3カ所。2階は2室、うち1室はワークルームとして使えるようになっていた。1階の共用スペースの片隅には小さな木箱があった。中にはお金が無造作に入っている。「どんぶりバンク」と呼ばれるこの箱には、たとえばつくってもらったご飯のお礼や、何かをしてもらったお礼の気持ちを現金として入れる。入れられたお金は皆で何かを食べる時の資金ともなるが、使い方も住人にまかされている。

共用スペースの使い方などをお聞きすると、ほとんどが「自由」「ルールは特に決まっていない」という返事であることに驚く。「拡張家族」のコンセプトは共有しているが、それ以外の暮らし方は個人の裁量なのである。家族として暮らすのだから当然ということであろうか。しかしその感覚を自然に共有するためには、相手のことを考え尊重する姿勢が何よりも必要となるだろう。そうか、それが最初にお聞きした、相手のことが「自分ごと」になるということか、と腑に落ちた。

ここには一般居住者の学生がふたり暮らししている。生活体験が浅い彼らにとっては「自分ご

と」という感覚の獲得過程そのものが得難い経験になるだろうし、どんぶりバンクにお金を入れる時にその対価を推しはかる作業は、金銭感覚を磨くさやかな訓練にもなりそうだ。

学生寮だった時代にはシャワー小屋が置かれていた庭を整え、畑を始めた。堆肥をつくるために落ち葉が大量に必要となり、建物の外周りの掃除をしながら近所の家の分もわけてもらうそうだ。おかげで近隣住民との交流も生まれるようになった。

「対話のために必要なのは場づくりですが、ただ場をつくらただけでは対話は生まれません。今、ここでの生活はうまく循環していると感じますが、それは住人の意識の高さに加えて、ここが京都だということも大きいと思います。相互に助け合う暮らしが身近にあり、周りの人がごく自然に受け入れてくださっていることも影響していると思います」(山倉氏)

面倒くさいことを意識し合い、 後ろ姿を閉じない関係性

ルールは極力決めないとはいえ、問題が生じた場合にはどう対応しているのだろうか。それは月に1回定期的に行う「ハウス会議」で話し合うという。出席は自由、コロナ禍への配慮もありオンライン参加者も多い。議長と書記は立候補制、終了後は議事録を作成し、住民、フラットエージェンシー、家主の宮崎氏が共有する。一例として「掃除の話」を挙げてくれた。入

実家に帰ってみると「今まで自分の家の中で誰がどういう仕事をしているかを意識したことさえなかったが、ここで暮らすことで、自分の家族のかたちに気付くようになった」といった声があがった。「拡張家族」を経験することで、新たな気付きを得る住人も多いようである。

しかし、厳格なルールを決めず多くのことを自分の裁量で行うのは、自由なようで実は面倒くさいことの連続ではないだろうか。誰かに決まりをつくってもらい、それに従う方が楽に暮らせる部分もあろう。そう聞いてみると、山倉氏も大きく頷いた。「そうなんです。きちんと生活することは本来とても面倒くさい。でもそれを互いに意識し合いながら暮らすことが大事なのかな、と。もうひとつ、拡張家族で大事なことに、後ろ姿を閉じない」という言葉があります。自分が経験したり、思ったことを発信せずただ閉じてしまったら、誰にも見えません。相手を家族としてみることで生まれた自分の気持ちや自分のものだけにしておいてもいいけど、後ろ姿だけは見せておいてね、と言うんです。親の背中を見て育つ」と言いますが、後ろ姿を見せておいてさえもらえれば、黙っていても受け取る人がいますから。C i f t が大切にしている「対話」と「自分の裁量で動く」ことは、ともすると矛盾が生じてしまうこともあり得るが、この「後ろ姿を見せる」こと、すなわち他者に対し閉じない努力ができることこそ重要なのだろう。その意識が働かなければ、



食事も自由につくりたい人がつくりたい分だけつくる。また、食農プランナーでもある山倉氏がマネージャーを務めるだけあり、食材も実に豊富だ。庭では、自分が育てたいと思った野菜やハーブなどが植えられており、その収穫も楽しみのひとつとなっている。



ハウス会議だけでなく山倉氏と橋本氏、そして家主の宮崎氏とのコミュニケーションも密に図られている。また、Ciftメンバーも、一般的な対話を通していろいろな問題点を解決していく努力を惜しまない。ちなみにフラットエージェンシーの社員も居住者のひとり。社員教育の場としても利用されている。

居当初、共有部分の清掃は業者が担当していた。面倒な水回りもやってもらえるとあって最初は喜んでいた住人たちが、その清掃方法に不満が生まれた。何度か意向を伝えたが、まだ不満が残る。先方にどう伝えればいいのかを話し合っていた時に、住人の学生からコロナ禍でバイトが思うようにできないという声が聞かれた。そこで出てきた提案が、その学生に清掃の仕事を発注する「ハウス内アウトソーシング」だ。本人もやりたいということでも実現したという。その結果どうなったのだろうか。「彼女が掃除上手ということもあって、私たちの不満も解消されました。面白いことに業者の人がしていた時には当たり前のことと思ってい

いくら空間をシェアしていても「自分ごと」と思えるまでの他者との新たな関係性は築けないのである。

また「新しい実験」であった一般居住者との暮らしについても、学ぶことは多いが「C i f t だから」「一般だから」と分けるものではなく、最近では一般居住者とC i f t 居住者がルームシェアをするケースも現れたという。「C i f t も次の段階に進んだという気がします」(山倉氏)。「拡張家族」のあり方がさらに拡張していきそうである。

今後の展望について

最後に、住まいや暮らし方についての取り組みなど、今後の展望をお聞きした。

橋本氏にとってこれまでは貸主、借主は「お客さま」という立場であったが、今回自分たちも対等な立場で仲間として住まいづくりに取り組んでいると実感したという。

「京都には伝統家屋がまだたくさん残っています。そういう家のよきを残しつつ、時代に合った令和の京町家をつくっていききたいという思いがあります。今回の事例をモデルケースにし、さらに進化させた案件をC i f t さんと共同で進めている段階です。建物も古いものに限らず、どんな物件でもやってみたいと思っています」山倉氏は、今後は「借りたいから探す」ではなく「自分の暮らしに添ったものを見つける」



山倉あゆみ(やまぐら・あゆみ) 1978年、新潟県生まれ。Sync Board Inc. 代表取締役/CEO。個人・地域・企業・行政・団体とさまざまな人と協働しながら、料理人経験を生かした食農プランナーとして地域創生伴走型のコンサルティング事業を展開。食や暮らしを中心に健やかに循環する社会をテーマに活動し、食空間を持続活性化する仕組みを生み出す。「京都下鴨修学館」では、関係者との調整、全体のコミュニケーションを担当し、住民それぞれの実験的暮らしに寄り添う。

橋本浩和(はしもと・ひろかず) 1980年、京都府生まれ。2002年、㈱フラットエージェンシーに入社。宅地建物取引士、賃貸不動産経営管理士、不動産コンサルタント、テナグマスター、上級相続支援コンサルタントなどの資格を持ち、現在はプロバティマネジメント部長として、多くの物件の管理運営に携わる。「京都下鴨修学館」のリニューアルに際しては家主、建築士、C i f t スタッフ、フラットエージェンシー建築部および本部・営業部の取りまとめを行う。

といったように賃貸のニーズやマッチングの方法が変わってくるのではないかと話す。「京都では自分の建物を役立てたいというギフトエコノミーの意識をもっておられる方も多いので、フラットエージェンシーさんと京都らしい取り組みができるのではないかと思います。また、拡張家族のようなかたちで人が住むという実験は、どの世代にも必要だと思っています。個別化が進んでいる若い世代はもちろん、近い未来の私を含め、老いた自分たちが、どのように暮らしていくか、そういう対話が生まれるような実験の場があればいいのではないのでしょうか」